

書 評

ソフィー・ドリンカー著 水垣玲子訳

『音楽と女性の歴史』

猪 本 隆

何しろ、これは500ページにわたって、細かい文字のぎっしり詰まった本です。最近とくに目の悪くなってきた私にとって、この本を読破すること自体、大変な出来事でした。この本は、音楽と女性のかかわり方を歴史的にいろんな引用をまじえながら書きあげた本ですが、女性と音楽の能力、ことに作曲という点にかなりのスペースをとっており、私は作曲家の端くれとして、あるいは女性の作曲家を育てるという立場にいることもあって、興味がありました。そんなこともあって、この本の書評を簡単に引き受けてしまったのですが、しかし読み進むうちに、書評などという大それたものは書けないと悟り、お断りしなければ、と思いながらそのタイミングを失ってしまいました。それで私は、書評としてではなく、一人の素人としてこの本の紹介と読後の感想を書かせていただきました。

この本を訳された水垣玲子さんがあとがきでこう書き加えています。「音楽史的にはもちろん、民族学、文化人類学、宗教学、女性学などの分野の知識が乏しい訳者には誤解があるかもしれない。ご教示いただければさいわいである。」(p. 461) 私も全く同じ思いです。

この本は1948年、音楽学者ソフィー・ドリンカーという一人の女性によって書かれ、アメリカで出版されました。そして昨年3月、水垣玲子さんの訳で、日本語版が、学芸書林から出版されました。

私が読んだほかの歴史書と違うと思ったのは、この本がいつも一人の女性の視点から、歴史（音楽ばかりではなく）がみつめられているということでした。

この本は、いろんな歴史的事実のなかから、彼女が選びだした多くの事例によって組み立てられ、それに基づいて著者の思いが文中のいたるところに表れています。男性の見た音楽史ではなく、女性の目を通しての音楽史観があることは、当たり前のことなのに私にはとても新鮮でした。ことに男性としては当たり前と思っていたようなこと、宗教のなかの、社会のなかの女性にたいする差別、偏見による女性の能力の疎外など、など。

また一方で、男性の目（私としては公平のつもりですが）から見れば、彼女の意見に不当なこともあるように思いました。たとえば、この本の現代の音楽教育や音楽家活動における女性の地位のことなど、ことに女性作曲家のことなど。勿論、この本の書かれた1948年のアメリカと現在の日本の社会状況や音楽の状況の違いもあるのですが……。

この本『音楽と女性の歴史』は、全部で18章から成り、キリスト教誕生以前の「満月」（1～8章）、それから中世までの「闇夜」（9～11章）、ルネッサンスから現代までの「新月」（12～18章）の三つの部分に分けられ、また一つ一つの章には、それぞれ象徴的なタイトルがつけられている。なお、雰囲気伝えるために、各章、冒頭の文章を書き写した。

まずはじめの部分、[満月] は、次のような文章で始まる。

「ニューギニアの男たちが戦争に出かけたり長旅に出るとき、女たちは、銅羅^{ドラ}をガンガン打ち鳴らし、新月が早く出るようにと歌う。空に細い金色の三日月を最初にみつけた人が叫び声をあげ、それからすべての女たちが喜び祝う。さあ、私たちには月が見える。夫たちにも月が見える。私たちにはかれらが元気であることが感じ取れる。もし私たちが歌わなかったら、夫たちは病気になってしまいうだろうし、災難がふりかかるかもしれない。

男は音楽を創らない。男はジャングルの薄暗いところで指揮棒を振ることもしない。聴衆がいるわけではない。しかし夜の静寂が深まり、わらぶき屋根の小屋が連なる村に二筋か三筋しか見えない光が消え、新月が空高く昇ると、リーダーの声がまるで月の弦の先を支えるかのように高らかに聞こえ、人々の声がそれに加わり、太鼓の連打にまもられて、豊かに力強く響きわたる。黒い瞳やほのかに光る浅黒い顔の面にふりそそぐ月の光が、死に物狂いの真剣さを照らしだす。女たちは、誰かを喜ばせるために行うのではなく、自分たちが楽しむわけでもない。これは、女たちだけによって行われ、女たちの目的のために行われる、女たちの音楽なのだ。

もし私たちが歌わないと、男たちが死んでしまう。女たちの歌は、生命のリズムを支配する力と呼ばれおす呪文あるいは歌なのだ。空に現れたこの月は、生まれたばかりの赤ん坊が子どもへと成長していくように、何日間かで完全な円へと満ちていく。女は男を護るために、歌うことによって祈願を成就する力をもっている。なぜなら、女たちは〈月の娘たち〉なのだから。」(pp. 17-18)

音楽の基本的で原初的な形は、今でも世界中のごく単純な社会でおこなわれていることと、我々の祖先がかってやっていたことは同じようなことであろう、という想像のもとに、ニューギニア女性たちをはじめとしているいろんな地方の女たちの紹介で、第1章が始まる。「生命をもたらし、食物と暖を与えて育て、霊的な世界と接触しながら人間性を保つ、これらのことは女のごく日常的な活動である」。(p. 24)

また、「共同社会にとって欠かせない儀式において女が重要な役割を果たしている」。(p. 31) 音楽において、舞踊において。

また彼女たちの「音楽の背後に、真に偉大な思想が存在する」。(p. 43) そして「出産は、深く、宗教的で、霊的な経験である」(p. 46)、等々。

こうして紀元前7000年前、5000年前、ギリシヤ時代にいたるまで、女性は社会の中心にあり、そのなかで女性の能力は男性と同じように、あるいは男性以上に発揮されてきた。勿論、音楽においても。

初期キリスト教の時代に入ってから女たちが音楽に参加することに関してたくさんの記述がみられる。

[闇夜]「紀元前五百年頃になって、輝かしい地球上の文明にも少しずつ暗い蔭がさしてきた。それは一度にではなくゆっくりと、ここにもあそこにもといった具合で……。」(p. 213) その後キリスト教教義の誤った解釈(?)から、女性の社会への、宗教への役割が次第に薄れていく。そして、音楽の祭司として女性が果たしていた役割や才能も次第に失われていき、男性の手に握られてしまう過程が詳しく述べられている。

たとえば、女性を排除しての教会での役割は、少年やカストラートへ、また女性の魂の救済のため女子修道院が各地でたてられ肉体的な出産から精神的な復活へ、それは結局、女としての力を奪われることになった。さらに終末思想により、貞節と禁欲の理想が打ち立てられ、女性への蔑視が進み、女が聖職の地位から締め出された。「このようにして、かつて芸術的想像力が大いに発展していた頃への扉は閉ざされてしまったのである」。(p. 274)

[新月]「西暦四世紀の終わりに女たちを襲った暗闇に、キリスト教社会の多くの場所に、その最高の教会会議の中に、そして女たちの音楽に覆いかぶさっていた沈黙の中に、三日月のかすかな光が再びきらめき始めた。夜の暗がりの中の月と同じように、女たちの音楽はほんとうに消滅していたのではなかった。ただ隠されていただけなのであった。そして今日まで、女性の音楽はまだ三日月の状態であり、満月になるまでには長い道のりを要する。それでもやはり、月は満ち始めたのだ。」(p. 293)

この頃、キリスト教とは違った方向から、女性の音楽的な力が取り戻されてきている、ということが述べられている。

時が進むにつれ、女子修道院は、富と力、技術と学識の伝統を持つようになり、女たちはある程度の芸術的独立を主張し始めた。トラバドルや、また十字軍がおこり、一部には女性崇拜の気運も高まってきた。やがてルネッサンスの運動がおこり、音楽と女は、もはやキリスト教教義において矛盾するもので

はなくなった。そして数多くの女性音楽家が生まれ、彼女たちは優れた作曲と演奏をした。女たちが今日音楽家として役目を果たしているこのような文化形態は17世紀のはじめに定められた。やがて近代社会になると、教会と城の權威の失墜、科学の発達、物質的利益の追及、公共のコンサートの隆盛により、女性音楽家の地位も向上していった。しかし著者はここでは一流の作曲家は、生まれなかったという。ではなぜ一流の作曲家が生まれなかったのか？という理由に、「……女は教会音楽家としての權威ある地位から除外されているがゆえに音楽を創作することができないというのが、女による超一流の音楽が存在しないことの現実的かつ充分な理由だろう」(p. 408)と述べている。さらに同ページの、一流の女性作曲家の欠如はなにを物語るかというくだりになると、やはりそれだけの理由で断定してしまうのは無理があるように思われる。

第18章において、現代の状況と将来の見透しについて述べられているが、この本の書かれた1948年頃のアメリカの状況と現在の状況（日本も）では随分違った状況になっており、音楽における女性の復権はさらに進んだと私には思える。また、大衆の音楽はプロの音楽家が技巧や目先の効果にこだわって、音楽の本質から離れていく傾向にあり……アマチュア音楽家が登場してきた、というくだりでは共感をおぼえた。

[満月]の部分、ことに歴史的に古い時代（ギリシア時代以前）までの記述は、記録が少ないのは当然だが、そのためかなりの部分が、推察で書かれており、冒頭に挙げた文章のように力みが多く、興味はかえって半減した。それに比べて[闇夜]から[新月]の前半の部分については、キリスト教との関係を中心になぜ女性がそれまで果たしてきた音楽的役割を追われるようになったかが、豊富な資料によって書かれており、興味深く読んだ。（このような書き方は、ほかの歴史書ではしてないのではないか、或いは私が知らないだけのことも知れないが。）

さて私の専門や興味からして、このような論文や学術的な研究には詳しくないが、当時の資料を集め、また現代にも残っている原始文明からも推察し、それを丹念に分析し、そこからひとつに結論づけていくやり方によって、あたかも、巨大なシンフォニーのようにも思える一冊のユニークな本が作られた。

著者が二十年も費やして書き上げた労作が優れているとしても、その訳本を一回読んだだけの私はその印象を述べるのはかなり無責任とも思うが、私がこの本から受ける第一の印象は、序文に書かれた著者の想いがいつも問われている、ということであった。

歴史書というものの常識が、事実の積み重ねを中心に書かれているものとすれば、この本は歴史書という分類には入らないのかも知れない。

著者がこの本を書くきっかけになった事がらを序文でこう述べている。

「みずからの感動を表現したいという熱望をもっている女たちが、なぜ音楽の領域では現代文明の重要な担い手としてすぐれたものを生み出していないのだろうか？なぜ女性は、自己表現の手段として、もって生まれた音楽的才能を使おうとさえしないのか？……なぜ彼女たち女性演奏家はもっぱら、男性が創作した音楽作品を演奏することだけに満足しているのか？なぜ女性は、女性自身の思想や感情を伝えるのに、身ぶりや言葉と同じように、音楽を表現手段として使おうとしないのか？」(pp. 1-2)

そんな疑問を、彼女は学者に聞いたり、本を調べたりしたが誰も答えてはくれなかった。

「それでも私は、完全にあきらめようとはしなかった。なぜなら、音楽のあらゆる面でのさまざまな話がたった一冊の本や、音楽についての情報や概略に、語りつくされているはずはないと固く信じていたから。私は、広大な音楽創造の歴史のなかに女たちを見つけ出そうと決心したのだ。そこにきっと女が存在すると信じていたからである。」(p. 3)

『音楽と女性の歴史』

さてそれで著者は、上記の問いへの回答を得ることができたのであろうか。たしかに音楽の歴史の上に、多くの女たちの姿を見つけ出すことができた。それは歴史書の目的であろうし、それは成功したであろう。しかし、はじめの四つの問いへの答えはどうであろう。

(學藝書林、1996年3月、本文461頁、3,800円)